
それでも僕は君を想う。

来々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも僕は君を想う。

【Zコード】

Z5732B

【作者名】

来々

【あらすじ】

どんなに好きな人でも、いつか忘れる時が来るのかもしれない。
でも僕は、君の事をずっと好きでいたい。
恋人達が、永遠の
愛を誓う話。

若年性アルツハイマー病

脳の細胞が萎縮して起こる記憶障害。老人痴呆等と症状は似ているが、アルツハイマー病はその症状の進行が速い。

「…………だそうです。」

「だから何よ？さつきから訳わかんないよ。」

「…………いや、だから何もりね？…………オレのこの病気になつたみたい」

「…………マジ？」

「…………うう。」

病院の帰り道、大学終わりの彼女と…………、早苗と一緒に一番最初に交した会話はこんなにあつけなかつた。

「それで？良ひやんは何がしたいの？」

「えつ？」

「やの事を私に話して、良ひやさせたいもつなの？」

「…………。」

そうだった。

早苗はこんな性格だった。

まあ、簡単に言つと幼なじみってヤツだ。

早苗と俺は、物心がつく前からいつも一緒にいた。

保育園、小学校、中学校、高校と、全てが一緒。おかげにクラスも
ずっと一緒にいた。

「へやれ縁」

とこつヤツか。

だが、

早苗はいつも俺より一歩前を歩いていた。

早苗いつも俺より大人だった。

小学生のとき、俺達はおつかいをたのまれて、一人で近所のスーパーへマーケットに行つた。その帰り道。
少し格好をつけて、

「早苗ちゃん、重そうだから、僕が持つよ。」

「いいの？本当に重いよ？」

「大丈夫だよ。僕だつて男なんだから。」

これがいけなかつた。荷物は、俺が思つていた以上に重く、当時の俺は、直ぐに疲れて、道に座つて泣き出してしまつた。

「…………早苗ちゃん。もう歩けないよ…………。」

「ほら、だから言つたのに。いいよ良ちゃん。今度は私が持つよ。」

「…………嫌だよ。」

「どうして？」

「…………だつて早苗ちゃんは女の子じゃないか。…………女の子には優しくしろつてお父さんが言つてたもん。」

「でも、重くて歩けないんでしょ？？」

「…………でも、嫌だ。」

そしたら彼女は、少し怒った声でこう言った。

「じゃあ良ちゃんと何がしたいの？」

小学生の僕は、酷くバカで。

小学生の早苗は、酷く大人だった。

結局、荷物を一人で半分ずつ持つて帰った。

この時から彼女の口癖は、

「何がしたいの？」
になつた。

そんな俺達が付き合い始めたのは、高校一年生の時。しかも、告白したのは早苗のほうだった。

八月の暑い日だった。

その頃の俺達は、部活に生徒会と忙しく、一緒に帰った試しがなかった。

……まあ、恥ずかしさもあったのだが……。

それなのに、今のはどうしてか、一緒に帰る事になった。

久しぶりに並んだ二人の背中。

無言で歩く夕暮れ。

少し気まずさを感じたその時、早苗が唐突に俺に話しかけて来た。

「良ちゃんといつて帰るの久しぶりだね。」

「あ、うん。」

「良ちゃん、いつの間にか私よりずっと大きくなつたね。」

「まあ、男だからな。」

「何か聞いた事ある言葉だね。」

「…………何が?」

「『男だから』ついやつ。ねえ、覚えてる?」

「…………あれは、…………忘れてくれ。」

「あはは。…………あんなに小さかつた良ちゃんが、もう大人の男になるなんてねえ。」

「まだ、俺なんてただのガキだよ。」

再び一人に沈黙があとずれた。

なんとなく横を向いてみると、なるほど確かに、早苗は俺よりもずっと小さかった。

久しぶりに並べた肩は、高さが不揃いで、なんだかおかしかった。

しまじくへじて早苗と田が合つた。

慌てて田を反らした俺に、早苗は緊張した面持ちで話しかけて來た。

「…………ねえ、良ければんつてさ、…………彼女とかつているの?」

なんとなげ『田』だと感じた。

「こや、こなこな?」

「やうなの…………。」

「だから向だよ?」

わざとジラして見た。

そうしたら早苗は、顔を真っ赤にしながらいつ呟いた。

「良ひやん……。私と付かれ合つてくれない?」

「え? ?」

一 心、驚く。

そして、まだ真つ赤なまほりの向へ早苗を見た。

小学生の頃を思い出し、早苗にむかひればかりだった自分を見た。

今の早苗の身体は酷く小さく、
今度は少しおかげで、

『氣が付いたら、早苗に抱きつこう』いた。

驚いた早苗の顔は、恥ずかしからず、もつ蒸発しそうな位、赤かつた。

「ちよ、ちよひど、良ちゃん! ?」

「早苗、お前にこの間にか」んなに少しあがつたのか。」

「良ひやんー? 何がしたいのよー?」

「早苗。俺は今度こそ守つたい。お前の事を守りたい。」

「…………良ひやん。」

「…………早苗、俺もお前の事が好きだ。」
「…………よろしく頼む。」

「

「…………ありがとう。…………良ちゃん。」

八月の帰り道。

もう日はとっくに落ちていたけど、八月の夕暮れは十分に暑く、汗もかいて、制服はもうべトベトだつたけど、それでも俺達はずつと抱き合っていた。

あれから、七年。

今まで、本当に色々な事があった。

大学に入り同棲を始めた。結婚生活みたいで、楽しかった。そりやあ喧嘩もした。でもその後に抱き合って、でもまた喧嘩して……二人で一緒に歩いて来た。

本当に楽しい七年間だつた。本来は大学に入れた事すら奇跡の俺だが、

早苗の助けもあり、無事に卒業できる。

そう思つていたのに……。

「…………良ひやん? 聞いてるの?」

「あ、あ。」

「それで、良ひやんはどうしたいの?」

「…………。」

「どうしたいの?」

と、言われても困る。

早苗の今後の事を考えると、俺達は別れたほうが良いだろ。

俺はこれから、全ての事を忘れ始める。

学校、友人、父さん、母さん、そして…………、早苗の事も。

早苗には俺と違つて未来がある。

この先、俺よりもずっと良い人を見つけるかもしれない。

だから、

「別れよう。」

そう言いたかったのに、元
頭では解っていたのに、
無意識に馬鹿で自分勝手な俺は、

「早苗、俺はお前とずっと一緒にいたい。」

と、言ってしまった。

そしたら早苗は、いつの間にか彼女に話しかけられたんだ。

「…………よかつた。別れようとか言われたらどうしようかと思つてたよ。」

予想外だった。

早苗は俺が間違つて言つてしまつた言葉を待つていたようだ。

「ど、どうして？」

「何が？」

「どうして早苗は、そんなに笑えるんだ？俺はもうすぐ、お前の事を忘れてしまうのに！？」

「…………良ちゃん、私は、たとえ良ちゃんに忘れられても、良ちゃんの事が好きだよ。だから、…………好きだから、良ちゃんの事をずっと想つているから、大丈夫なの。」

「…………で、でも。」

「でも、じゃないの。大丈夫だよ。一人で頑張るわ。」

「早苗…………。」

いくつ、

「忘れない」

と心に誓つても、忘れる時はやつて来る。

でも、

「早苗が好きだ」

という気持ちは、忘れないでいよう。

一人でも、

辛いかもしれない。
悲しかもしれない。
苦しかもしれない。

でも、俺は君が好きなんだ。

僕が世界を忘れて、
世界が僕を忘れても、

それでも僕は君を想う。

(後書き)

皆さん、こんばんは。来々です。今回は久しぶりに恋愛物を書いてみました。如何だったでしょうか？これからも色々なジャンルを書いて行きたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。次回も、ご期待下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5732b/>

それでも僕は君を想う。

2010年10月12日04時17分発行